



ペスト対話に見える近世ヨーロッパ（二） [史料翻訳]

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 博光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004407

【史料翻訳】

ペスト対話に見える近世ヨーロッパ（二）

佐々木 博光

以下は、Dialogvs medico-chymicus. Ein Gespräch/ Vber den Artzten/ so von der jetzo regierenden Seuche der Pestilentz geschrieben haben/ vnd vber jhren Artzneyen/ Gehalten zwischen einem vornemen/ gelehrten Bürger/ vnd einem Handwercksmanne/ in einer berumbten Stadt Sachsenlandes. Anno: 1607.（作者不詳『医薬に関する対話。いま猛威を振るっているペストについて書く医師、彼らの薬について、身分の高い学のある市民と一介の手工業者の間で交わされた会話、ザクセンの名の知られた都市にて（一六〇七年）』の全文和訳の後編である。前編は大阪府立大学の紀要に掲載されている*。あわせて参照されたい。訳者はドイツ連邦共和国ヴォルフエンビュッテル市にあるヘルツォーク・アウグスト・ビブリオテークで、ペスト文書と総称される史料群と取り組んださい、このペストに関する対話に出くわした。

対話は手工業者と学のある市民をパートナーに設定し、手工業者がペストを扱う医学書の使い勝手の悪さ、難点を嘆き、市民がそれに応答して、その上手な使い方を指南するという形で展開する。前編で手工業者はとくに医師の勧める薬が多すぎるとこぼした。性別、年齢だけでなく身分によっても薬を換えなければならないという。それではお金がいくらあっても足りない。貧者はとてももたない。これに対して市民は、薬はひとりに一種類でよいという。生涯一種類の薬しか飲まなかった古代のミトリダテス王が、毒を飲んだのにびくともしなかったというウィットに富んだ逸話を紹介し、自分の考えを裏づけようとする。つぎにペストの毒がペストの予防や治療に有効であるとする当時の医学書の説明に、手工業者が異議を唱える。これに対して市民は毒の効用を弁護する。さらに手工業者はペストに関する医療書の問題点を突く。

* 佐々木博光「ペスト対話に見える近世ヨーロッパ（一）」『人間科学：大阪府立大学紀要』5、2009年、123-135頁。

手工業者：ペストにかかる率をぐっと減らすために、瀉血もしくは通痢をすべきだという人があるかと思えば、これに真っ向反対する人もいます。体液（彼らはそう呼びます）を活発にすべきではない、そうすればペストが付着しやすくなるからだというのです。ペストの時期には風呂に入るなという人があるかと思えば、それを励行すべきだという人もいます。乾燥した塩漬け肉、それを使った刺激の強い料理全般をやめ、雉、鴨、雄鶏や活きのいい雌鳥、去勢した肉用雄鶏、雲雀があれば、利用できる他のものに換え、高価なものを食べる人もいます。わたしは貧しい男です、羊、子牛、牛の肉が食べられるならば、神に感謝して、鳥のことなんてすぐに忘れてしまうでしょう。瀉血や通痢が効くと頭から信じている人は、こんな時期にもそれを使うかもしれません。

市民：でもぼくは普段の食事を続けるのが一番だと思うよ。瀉血や通痢が効くと信じる人ならば、こんな時期にもそれを使うかもしれない。他の時期にも、ましてやこんな時期には、災いを前に普段の空の状態を維持すること、通痢によって体を空にすることからどんなことが起こるのかは、非を見るより明らかです。看護者は時間前に入浴しなければなりません。こんな時期に入浴を慎むべきではありません。体の汚れを落とすためにそれは必要です。でも熱すぎないように、公衆浴場を使わず、自宅の風呂を使うべきです。飲食に関して、乾燥した、堅い、塩漬け肉を禁じるなんてことはどうでもよいことです。ぼくはむしろ、ペストの時期にはすべての料理に他の時期よりも塩を利かすべきだと思います。だから塩漬けの乾燥した肉を貯えなさい。医師たちも口をそろえて言っています、ぼくが言っているのと同じものを使うように。いま君が話した食事だけを取らなければならぬとすれば、ぼくはこの食事をどこで手に入ればよいのか聞かなければなりません。ぼくはもう何年も雉なんて見ていません。シギ、ヤマウズラ、インディアン雌鳥も、当地ではなかなか手に入らない高価な料理です。これらはペストの時期には大なり小なり腐敗していると考えるべきです。塩は腐敗に害を及ぼすでしょうか、むしろそれを止めるのではないのでしょうか。塩以上に腐敗を抑えるものがありますか。主婦ならばよく知っています、腐ったり、悪臭を放ったりすることがないように、肉を塩漬けにしたほうがよいということを。

手工業者：でもそれははっきりしません。

市民：そんなことはありません。塩以上に腐敗防止に役立つものが何かありますか。だから家畜の飲み物にそれが混ぜられることもよくあるのです。

手工業者：でもそれは体をたいそう干上がらせます。他の乾燥した堅い肉も同じです。

市民：それはいい。すべての医師が一致して、このような時期には体のなかにあまり多くの水分が集まらないように心がけるべきだということからです。だから医師たちは赤い丸剤、ないしペスト丸薬を頻繁に摂取するよう処方します。かれらの薬の大部分は乾かす性質をもちます。さらに燻製にされた肉、もしくは堅い肉を食べるとしても、マスタードや同じような塗り物をつけるのがふつうです。それは同じ肉を消化しやすくします。小さな弊害がそこから起こるかもしれません。しかしペストがやんだらそれは簡単にいさめることができるし、改善することもできます。食事のことでとやかく言われる筋合いはありません。いい加減、不作法な食事で間に合わせる人よりも、やわらかい、健康な食事をつねに取っている人のほうが、かえって感染しやすいという事情もあります。これらの医師は人々が普段の食事を変えることを説きます。そうすることで彼らは、ヒポクラテスやガレノスの教えと真っ向対立することになります。かれらはうちつづく疫病の時期に、習慣を変えることを（それがひどすぎることがなければ）望まないからです。こんな時期に習慣の変更はなるべくしないにこしたことはありません。猛威を振るう、危険率の高いペストとその死に対して、安全な瞬間などほとんどないからです。

手工業者：ペスト丸薬の話題が出たところで、聞きたいことがあります。本当にそれは効きますか。

市民：使って悪いことはありません、とくに水分過多や極度な便秘の場合には。ペストに対して九死に一生を得た遠い国の昔の医師の話で、毎日丸薬を飲んだ父家長とその身内は、ペストに対してびくともしなかつたと聞いたことがあります。

手工業者：ぼくはそんなことでできないし、ぼくの身内もそこまでではできません。ぼくはそれを試し、なんとか二度摂取しました。でもそれはとても辛く、知らないほうがよかったと思ったほどです。どうやってそれを毎日摂取するのですか。この丸薬のエキスだけを取るとしても、一日一錠がやっつです。

市民：ありきたりのエキスにどんな効果があるのか、ぼくにはわかりません。エキスはもともと少量の摂取で通痢を助けるために考案されたものです。けれどありきたりのエキスでも、それを採取したものを通常のように生で与えるよりも、多くの効果が期待できます。エキスを作るだけならたいした技術は要りません。けれど正しく作り、時間と手間をしっかりとかけるとなると話は別です。

手工業者：そもそもそれは大きな出費に見合いますか。エキスはつねにふつうの薬よりもはるかに高くつくものです。ぼくは自分や妻子のためにしか、この丸薬から抽出

された本物のエキスを手に入れることができません。それがペストに対してよく効くということがわかれば、ぼくは自分の使用人にもとのペスト丸薬を与えましょう。

市 民：ぼくなら使用人に自分が使うのと同じくらいよい予防薬を与えるよ。万一使用人が感染すれば、子どもたちにうつらないか心配しなければなりません。子どもたちは家から出さないこともできますが、使用人は外に出て、用を済まさなければなりません。だから気の毒な使用人こそ、多くの場合に妻や子よりもよい薬を必要としているのです。

手工業者：ご心配はごもっともです。予防についてぼくが変だと感じる報告から、やろうと思えばもっとたくさんの論点を引き出すことができます。でもそれは放っておくことにします。治療においてそれらは厄介なことを教えており、ある人が固く信じていることを、他の人はまったく知らないといった事態が生じています。今度はそれについて簡単にお話します。

市 民：どうぞ話してみてください。もしかすると君が正しく理解していないだけかもしれませぬ。

手工業者：そうかもしれませぬ。でも身分の高い学のある人のなかにも、厄介な教えに憤りを覚え、それになじめない人もたくさんいるはずで。

市 民：いったいなぜ。

手工業者：患者が第一に瀉血を受けることを望む人がいます。けれどそれに猛反対で、この病気に瀉血は危険極まりないと書く人もあります。すぐに強い瀉下剤を与え、それによって毒を体外に出すことを考える人がいます。反対に最初から瀉下剤には目もくれず、すぐに発汗飲料を与える人もいます。さて、君はこれをどう思いますか。

市 民：ぼくはすぐに発汗飲料を与える人たちに賛同します。

手工業者：でもなぜ。

市 民：第一に毒は繊細かつ霊的なものなので、瀉血や排便ではなく、発汗によって排出されるべきです。第二にこの病気の最中、人間の体力は始めもその後も激しい攻撃にさらされるので、瀉血やその他をおこなえば参ってしまいます。それによって悪い血ばかりでなく、よい血も減るからです。そこには人間の生命が宿り、感染を食い止めます。いまこれによって病人の体力が衰えれば、どうやって自力でうまく毒を排出することができるでしょうか。第三に血が血管から抜き取られると、毒が広まり、空になった血管や四肢を満たす好機が生まれます。第四に、

すぐに瀉血（そう教えるものもあるから）や発汗といった体を空にする二大手段を、間をおいて合わせて使うか、排便を使ってすっきりするとしても、患者には負担が重過ぎるでしょう。でも発汗飲料が後日に延ばされると、毒が人間の中枢を支配し、汗をかいても徒労に終わる危険があります。危険度は少ないにしても、瀉下剤にも同じことがいえます。これを使えば、よい血を残して悪い血だけを取り去ることができるかもしれませんが（瀉血ではそれは無理です）。このような瀉下剤に、通常ならばペストに抗うものが付加されます。

手工業者：でも患者が多血であれば、あるいはよくない水分が過剰であれば、どうしますか。激しい熱が出るとか、瀉血や通病を効かなくするようなその他の不測の事態が出来るとするれば、どうしますか。

市民：通病をおこなう前に、準備薬、すなわち血なまぐさい、きめの粗い、ねっとりした水分をこしわけ、よい血から分離し、余分な水分が排出されるさいに通る血管や経路を開き、通病をよくする薬を使うべきです。でも烈しい疫病にさらされたら、この説を引っ込めて言いなさい。病人が手遅れになり、死に至ることがないように、すばやく強引にでも病気に抗わなければならないと。この期に及んで人は正しく行動し、ヒポクラテスやガレノスの、「差し迫る事態に直面して、つねに過去を振り返ろうとする」他の高名な医師たちの説に従います。火事をもっとも大きな被害を出すときにかぎって、もっともよくそれに抗うことができるのです。しかし彼らが鉄槌、深刻な困窮云々ともいわれる危険な疫病が疾走するさなか、必要とあらば、病人を生命の最大の危険から救うために、第一に準備薬を整え、よくない水分を抜くようにすべきです。ペストのような疫病のさなか、これをおこなわない手はありません。それは人間（すぐに建てることのできるものではないので）を知らぬ間に葬り去る、最速、最悪、深刻で危険極まりない疫病ではありませんか。しかし毒でなくして何がそんなに速く人間を葬りますか。血の状態や悪い体液は問題ではありません。これらは人間を殺すのにもっと多くの時間を要するからです。それゆえ何はともあれ「一番差し迫ったものを優先し」、もっとも死の恐怖が大きい毒に注意し、それが抑えられるべきです。これがおこなわれ、その上に瀉血や通病が必要ならば、おこなわれるべきだし、患者の体力はそうでない場合よりも、よくもちこたえることができるでしょう。根絶やしにされた毒によって、患者の体力がもはや大きく損なわれることも、圧迫されることもないからです。

手工業者：かつてこれが誰かある医師によっておこなわれたという見本があれば、話がわ

かりやすいのですが。

市 民：ペストの時期に瀉血を一番に実行するのはよせ、というすぐれた医師の意見なら、いくらでも挙げることができます。彼らは経験から、瀉血された人たちのほとんどすべてが、第一にそれを施されたということを知っています。

手工業者：瀉血がどんな患者にもよくないと、あなたが考えておられるのがわかれば十分です。

市 民：それに関する自分の意見を簡潔に、やんわりと述べるならば、瀉血はつねにこの病気の場合には益よりも害をもたらしてきたし、これからもそうでしょう。ここでもやはり多くの著名な医師たちによって、必要ならば証拠を補強することができます。しかしペストについて書く人は、他はさておき、ただ一つランギウスが書簡の一八番、第一書で書いたことだけは、読んでよく覚えておくことをお勧めします。

手工業者：あなたの意見に賛同します。熱病はペストと違い今日明日人間を奪い去ることはないからです。あなたのおかげで前はよくわからなかったことがいまはよくわかります。日ごろ予防にも治療にも役立つ薬があるということ、老人、成人ばかりか若者にも、そればかりかおんなこども、身重の人、乳を与える人にも喜ばれる薬があるということを知ったのは幸いでした。でも多くの人たちが口をそろえて言います。一つの薬でみんなを癒そうとする人は、一つの靴型ですべての人に合う靴を作ろうとする靴屋に等しいと。

市 民：そのたとえはここではふさわしくありません。それどころか誤ってさえいます。多くの人たちが若いか年か、小さいか大きいか、男か女かにかかわりなく、一つの皮から靴を作ることができます。

手工業者：たしかにそれならできます。でも一つの靴型の上ですべてを作るわけではありません。

市 民：薬は一つでも、それは多くの人たちに与えられます。靴に大きな靴型と小さな靴型があるとしても、一組の靴に使う皮が多いか少ないかは別として（当然そこから一つ一つの違いが生まれる）、皮を使うことに変わりはありません。一種の薬が全員に与えられるとしても、量は人によって違います。医師は自分が十分と考える量を与えるものです。医師がおとなにもこどもにも投与する薬をもっていれば、一度に処方する量はこどもには少なく、おとなには多くなるだけのことで、医師には「つねに一つ、一つだけを課せ」という「公理」があります。一つの病気に一つの薬。しばしば別の病がペストに加わり、それゆえ一種以上の薬を

服用しなければならないとしても、最初にペストの毒を迎え撃ち、それを抑えたら、その後で別の病の対策を講じたらよいのです。ペストの被害は若者の場合大きく、時として老人の場合よりもはるかに大きい、しかも「致死率はとてつもなく高い」とくる。二つのうち「最強の薬」を使ってならない道理はありません。

手工業者：こぶや瘍を開くとすれば、一体どうやって。

市民：ものわかりのよい外科医のところに行けば、それに合った外用の、特別な薬があります。わたしは人びとに、しばしば名前を挙げた名医がしたのと同じことを教えるでしょう。

手工業者：ああ、あなたは前に言いました。ペストに関する報告を何一つ買ったことはないし、読んだこともないと。でもいまはつきりしました、この危険な時期に毒に対する良薬を都合しようとしないうちに、あなたは人生に飽いているわけでも、冷めているわけでもないということが。あなたがふつう処方される薬をほとんどもたないならば、神のつぎに頼れる何かもっとよい薬をもたねばなりません。それはありがたい。わたしにも情報提供をよろしくお願いします。わたしは資産次第ではふたたび借金してもかまいません。

市民：あなたはペスト水の入った小さなコップをもっています。それがわたしの家族を予防し、治療してくれるならば、わたしもそうするでしょう。他の薬など眼中にありません。

手工業者：ああ、本当に感謝してください。それはなんと美しく、きめ細やかで、優雅に見えることでしょう。それはまるでまばゆい金のように光を放ちます。なんと強い香りがすることでしょう。

市民：それはいい。薬が使われる病気が大変重く、扱いにくく、霊的であるなら、薬も強く、扱いにくく、霊的でなければなりません。胃や他の四肢にそれが長くとどまり、ずっと後になっても消えることがないように、すぐに消えず、妨げられもせず、遅滞なく毒に抵抗できるように。

手工業者：一体どうやってこの水を使うのですか。

市民：明日君がわたしの家に来てくれたら、わたしは君のためにそれを喜んで書いて差し上げましょう。これ以上ここにいる時間はありません。君さえよろしければ。

史料解題

中近世の史料で、対話と呼ばれるジャンルに属するものは少なくない。しかしペストに

関する対話は珍しい。管見のかぎりでは、ここに訳出した一点のみである。わたしはヘルツォーク・アウグスト図書館でこの史料に遭遇した。同館はこの史料を二点所蔵する。いずれもその他の近世史料と同じく、複数の文書とともに合本されている。前近代には書物は製本された形で販売されていたわけではない。書店で売られているのは本の中身だけであった。おそらく対話の冒頭で手工業者氏が書店で見たというペスト文書も、そのような形で並んでいたことであろう。製本は購入者が自前で行うことになっていた。このため近世には製本業者 **Buchbinder** がたくさんいた。製本用の表紙は高価であるため、本の所有者は何冊かをまとめて製本しようとした¹。その際同一ジャンルごとに製本したいというのが人情で、この対話はいずれも医師のペスト文書やペスト条例とともに合本されている。この史料が人を食ったような体裁をとっているものの、医学的ペスト文書と認識されたからに違いない。

わたしがこの対話の訳出・紹介を思いついたのは、この対話が近世の医療関係者のペスト文書で話題になる問題をとらえているからだ。それはふたつある。ひとつはペスト医療と社会格差の問題、もうひとつは毒の利用可能性の問題である。いずれの問題に対しても、当時の医師たちの解答は宗派ごとに特徴が見られた。カトリック、ルター派、カルヴァン派の三つの宗派の特徴に留意しながら、当時の医療関係者の間でペスト医療に関して何が問題になっていたのかを明らかにしたい。

宗教関係者の宗派を把握するのは造作もないことだが、医療関係者の場合はそんなにたやすいことではない。医学の世界で著名な、18世紀の医療関係者に関する人名辞典にも、医師の経歴の紹介に、彼らの属する宗派に関する報告はない²。したがって宗派が同定できない医師も少なくない。その場合には医師が活動した地域の代表的な宗派を考慮する以外にない。例えばこの無名氏のペスト対話はザクセンのある都市で書かれたとあることから、ルター派の医療関係者によって書かれた公算が大である。しかし地域性は医師の宗派を判定する決定的な証拠にはならない。他宗派の君主や都市に侍医として仕える医師も少なくないからである。また、たとえ医師の宗派が判別できたとしても、宗派の教義がその医師にとってどれくらいの重みをもっていたかは別問題である。医師たちはおそらく自分の宗派の患者ばかりを診たわけではない。また自分と同じ宗派に属する医師の書くものばかりを読んだわけでもない。ドイツのプロテスタント系諸大学の多くの医学生は、イタリアのカトリック系諸大学に留学するのがふつうであった。近世の医師たちはすでに超宗派的に活動していた。したがって医師の宗派別考察は注意を要する。しかしそれでも宗派という観点は近世期の考察には有益である。

ペスト対話で手工業者は備えておかなければならない薬の多さを嘆いている。彼が目

したペスト文書では、男女の性差や老若幼少の年齢差のほか、奉公人 *Gesinde* 用の薬を備えておくことが説かれているという。前近代のヨーロッパは奉公人という職種の比重が大きい社会であった。奉公人たちは、住み込みか通いかに関係なく、ペストに罹ると主人宅を離れ、ペスト病院と呼ばれるペスト患者専用の病院に収容されたようである³。予防薬や治療薬も身内と奉公人で分けられていた。この手工業者が本屋でたまたま見たペスト文書は、ルター派医師の書いたものだったようだ。ルター派の医師たちは、ペスト医療に関して、貧者向けの医療と富者向けの医療を分ける傾向があった。貧者の使う薬と富者の使う薬も別個に指示された。

医学的ペスト文書は中世来一定の様式で書かれてきた。それは通常三つの部分からなっていた。ペストの原因に関する説明、予防、治療の三部である。原因については、中世にはミアズマ説が支配的であった。ペストは腐敗した空気から起こると言われた。パドヴァの医師ジロラーモ・フラカストーロ（1519 - 1585）は、1546年に出版したペスト文書で、ペストが「ペストの種子」と呼ばれる有害な種子によって伝播するという新説を唱えた⁴。フラカストーロはペストおよびペストに似た熱病の原因を突き止めることに終始し、予防や治療の方法を提示することはなかった。彼の貢献は本来ならば医学のペスト理解を劇的に変えてもおかしくなかった。しかしほとんどの医師にこの新説を受け入れる用意がなかった。近世にはミアズマ説と感染説の混合説が一般的になる⁵。多くの医師がペストは汚染された空気によって人から人に伝わると考えていたようである。ペストの原因に関する考え方の変化は、とくにペストの予防や治療に関する議論に大きな変化をもたらすことはなかった。

フラカストーロの感染説は、マルティン・ルター（1483 - 1546）の同志であり医師でもあったクラート・フォン・クラフトハイム（1519 - 1585）によってドイツ帝国の圏域に持ち込まれた。彼はイタリア留学から帰り、1553年に発表したペスト文書で、ペストが「ペストの種子」によって伝わることを指摘した⁶。彼の文書は医師のペスト文書の通例に従い、「ペストの原因」、「予防」、「治療」に関する考察からなっている。彼はフラカストーロと違い、予防と治療も示そうとした。通常の医学的ペスト文書は、男女の性差、妊婦かそうでないか、若いか老いているか、あるいは幼少かの違いによって、医療の内容を変えることを提案する。彼はペスト医療にこれまでにない新たなカテゴリーを持ち込んだ。彼は貧者と富者で、別々の食餌や薬、治療のための異なる材料や方法を提案する⁷。貧者と富者で医療の内容を分けるという考え方は、ルター派医師のペスト文書に通底する要素になる。

ブラウンシュヴァイク侯国の参議で侍医でもあったヤーコブ・ホルスト（1537 - 1600）

は、富者と貧者で燻蒸 *Räucherung* に使う材料を区別した。ペスト予防で問題になるのは、換気、入浴、食餌、薬と並び、部屋を消毒する燻蒸であった。ホルストのペスト文書には、「富者の燻蒸はわたしの粉末香で、とくにバラ香水や肉桂香水を混ぜるとよい。貧者の場合はイチジクの葉や木、オークの葉、ニガヨモギを浸した酢を、熱した石に注ぐ」とある⁸。

帝国自由市リュールベックの侍医エルンスト・ロイヒリンのペスト文書のタイトルは、『富者と貧者のためのふたつの家庭医学』である⁹。彼は貧者と富者の医療をはじめから区別する。燻蒸のための材料は当たり前のように区別される。区別は燻蒸ばかりでなく食餌にも及ぶ。「…富者はこのような疫病の時期には軽めの食事を取るよう心がけるべきだ。すなわち若い牛の牛肉スープ、…、子牛の肉や若い牛の肉、…も。平民や貧者は考えられた食事を取ることはできない。彼らは豚肉（しかしそれは大変有害）にとどまらざるをえない。調理するとすれば、酢で少しすばくすべし。しかしふつう彼らはそれを生のままかハムで食べるので、にんにくや大根おろしを少し加えて食べるべきだ。」¹⁰

薬も貧者と富者で区別される。薬にいたっては夏と冬で曜日ごとに指示がある。ロイヒリンはある箇所ではわざわざ「貧者」„Die Armen“の活字のポイントを上げてさえている。おそらくそれは自らの論点を強調したかったからであろう¹¹。

ルター派医師やルター派が優勢な地域で活動する医師のペスト文書は、財産の多寡に応じて異なる処方を与える。いっぽうカルヴァン派の医師のペスト文書では、社会的なカテゴリーは問題にならなかった。フランスの改革派の外科医アンブローズ・パレ（1516 - 1590）は、彼の外科学の書のペストに関する記述で、社会層および格差という問題をまったく念頭に置かない。彼にとって重要なのは類概念としての人間で、彼のペストに関する記述で貧者や富者といったカテゴリーが問題になることはない¹²。これが大学教育を受けたことがない、現場たたき上げの外科医の発言であることに注目したい¹³。医療実務を担い、社会との接触が豊富であるはずの外科医が、社会よりもむしろ科学の進歩を意識したペスト文書を残しているのである。クロムウェルの腹心で医師のトマス・シデナム（1624 - 1689）も、彼のペスト文書で社会的なカテゴリーを使わなかった。彼にとって問題なのは「患者」の治療であった¹⁴。ルター派の医師が強く社会を意識していたとすれば、カルヴァン派の医師を支配したのはむしろ医療の科学性に対する関心であった。

カトリックの医師は、医療と格差という問題でルター派医師とカルヴァン派医師の中間の位置を占めた。彼らもおそらくルター派の医師の影響で、自身のペスト文書中で貧者、富者という概念を使い、社会格差のことを考えていた。しかし彼らはルター派の医師が表明するような、貧富の格差に応じた二重の医療をもとめなかった。カトリックの医師は行政や富者に、補助金や寄付による支援を期待した。貧者に対する配慮からカトリック医師

独特の議論も生まれた。例えばヒッポリトゥス・グアリノニウス（1571 - 1654）は、ペストで死んだものの衣類や寝具の再利用を提案する。本来なら焼却が二次感染を防ぐもつとも有効な措置だということは、彼もよくわかっていた。この点はルター派の医師たちと変わるところがない。しかし貧者の状況はそれを許さない。彼は一連の必要な消毒措置を講じたあとで、貧者が死者の中古の衣類や寝具を利用することを認める¹⁵。テオバルドゥス・フェッティッヒも、富者の寄付によって貧者の医療を維持するという要求を掲げた¹⁶。

ルター派が強い地域で活動した医師ヨーハン・ハインリヒ・フライターク（1581 - 1641）は、1636年のペスト文書で、貧者と富者の医療を厳格に区別した¹⁷。彼はフラカストーロの影響で「ペストの原因」を「有害な種子」にみた。それによってペストや「ペスト性の熱病」が発症すると考えた¹⁸。彼はフラカストーロの感染説を帝国にもたらしたクラート以上に、予防と治療で厳格に貧者と富者を区別した。まず「燻蒸」のために提案される植物や香水が富者と貧者で異なった¹⁹。

貧者と富者が区別されるのは、予防措置として取られる燻蒸ばかりではない。治療でも差がつけられた。ペスト文書で話題になる治療法は、主に発汗、通痢、瀉血の三つであった。発汗と通痢は体内の毒素の排出のために必要と考えられた。瀉血は病気によって生じた体液バランスの失調を快復するために行われた。これらの治療法は患者の体力を衰えさせ、病気に対する抵抗力を奪い、かえって逆効果だとする意見もあった。訳出したペスト対話の著者もこのような立場をとっているようである。これらの治療法の有効性はそれぞれの医師の個人的な見解にかかわる問題で、宗派帰属との関連は薄いように思える。

フライタークの文書は、例えば治療の「瀉血」の項でも、注射のために使う塗り薬に貧者と富者で差をつけた²⁰。彼はなぜ医療に差をつけなければならないかを説明する。それは行政の負担を抑えるためである。貧者医療には「お金がかかる」上、「薬の間違った処方方で益より害をなすこともある」²¹。これがオズナブリュック司教の侍医として招かれ、1631年までこの地位にとどまり、宗派の違いから最後は職を辞した熱烈なプロテスタント医師の発言であることに注目したい²²。

カトリック医師のなかにはグアリノニウスやフェッティッヒのように医療の社会面を見据えるものもあったし、フラカストーロや、ペストの種子を自前の顕微鏡で観察したアタナシウス・キルヒャー（1602 - 1680）のように²³、科学的な医療の進歩を追及するものもあった。カルヴァン派の医師が一樣に学術色の濃いペスト文書を残したのに対して、カトリックの医師は医療の社会面に比重をかけて論じるものと、医療の学術性に重きを置くものにはっきり分かれた。社会医療の分野で、カトリックの医師はルター派の医師とは対照的に、貧者と富者の医療の一致にこだわった。

社会医療の問題は救貧の問題と密接に関連している。近世の救貧制度の変質について、ポーランドの歴史家ブロニスワフ・グレメクが画期的な研究を発表した。グレメク以前は、この時期の救貧制度の変質は宗教改革との関連で説明された。中世には修道院が、慈悲と施しの精神にもとづいて貧者の支援を受けもった。富者の救霊のために貧者の存在は不可欠で、清貧の理想が示すように、貧困は美德ですらあった。宗教改革によってプロテスタントに移行した地域では、修道院が廃止され、修道院に代わって都市が救貧行政を掌握した。いまや貧困は市民的な道徳に照らして怠惰が原因で起こる悪徳と理解されるようになり、貧困撲滅のための職業規律の訓練が、修道院で行われた慈善事業に代わって救貧行政の柱になった。このような前提に立つ旧説は、プロテスタント世界とカトリック世界で救貧制度が異なる展開を見せたとして想定した。これに対してグレメクは、上述した救貧制度の移行が、プロテスタント世界だけでなくカトリック世界においてもパラレルに進行したことを指摘する。彼によると救貧制度再編の鍵を握ったのは人文主義者であった²⁴。近世の救貧制度に関する研究史の推移を概観した。ペスト文書に関する目下の議論は、以上の研究史の流れに逆行するような内容を孕んでいる。それは救貧制度に関する旧説を想起させる。なぜなら医学的ペスト文書においては、ルター派とカトリックの医師で、貧者に対する態度が根本的に違うからだ。

それが現実の救貧制度に反映されたかどうかはわからない。しかしカトリックの医師は16世紀の終わり、17世紀の初頭にはまだ、社会医療に対する富者の支援を期待できた。これに対してルター派の医師がすでにそのような期待を失い、現実的な解決を模索し、社会医療を個人主義的に運ぼうとしていたのは注目してよい。マックス・ヴェーバーのように宗派による相違を重視する歴史理解に対する反動として、近年は宗派間の差異を相対化する宗派化論のような議論が盛んである²⁵。グレメクの理解は救貧制度版の宗派化論と言えなくもない。これに対してここで明らかになった事実は、各宗派の救貧行政、救貧観について再考を促しているように思える。今後の課題としたい。

16世紀にはペストの治療に新しいアイデアが出現した。訳出した手工業者と市民の対話を執筆した無名氏は、手工業者にペスト医療にペストの毒を用いることの是非を執拗に質問させていた。その具体的な方法を、改革派の外科医アンブローズ・パレが見事に要約している。彼は極端なペスト療法を提案した。すべてのペスト条例が異口同音に死んだ動物を通りに放置すべきでなく、できるだけ早く片づけることを定めた。死骸から立ち上る腐敗臭が警戒されたのである。このような通念に逆らい、パレは市内にいるすべての犬猫、その他の動物を殺し、それを通りにまくことを指示した。古い悪臭をペストもろとも新しい悪臭によって追い払うのが狙いであった²⁶。

毒をもって毒を制す。一種のショック療法は予防だけでなく治療にも見られた。パレは別の箇所で、薬の効果を増幅するために毒を薬と調合して使うことを主張する²⁷。ペストの薬として当時テリアク、ミトリダトが勧められた。どちらも昔は毒と認識されていた。しかしパレが理解する毒はこのような毒ではなく、ペストの毒 *Pestgift* である。治療においても彼は、毒の投与によって毒を制することを提案する。

多くの医師がこのアイデアについて語っている。ルター派の医師ヨーハン・ボッケリウス (1535 - 1605) は、1597 年のハンブルク市のペスト条例において、それについて明確に意見を表明した。「毒を追い払うために、胸に赤い亜硫酸、高品質のメルクリウス、他の毒を付けるものもある。彼らは、毒は毒で、悪は悪で追い払えると言うからだ。このような人びとに、わたしはどうしても同意することができない。」²⁸ ボッケリウスも毒が毒で追い払えるというアイデアを知っていた。しかしパレと異なり彼はこの方法を支持しない。

彼は毒を使うもうひとつの予防についても慎重な態度をとった。「空気を悪臭で変え、それによって毒を追い払えというものもある。犬猫その他の動物を殺し、それを通りに放置し、その場で腐らせ、その臭気によってペストの空気が変わり、毒が追い払えると考えられるものもある。しかしこれについては、ふたたび空気が清潔、清浄、できるだけ湿気を払い、乾燥した状態に保たれるべきだというすべての学識者の意見に賛成である。」²⁹ ボッケリウスはおそらくパレの議論を知っており、なおかつそれに異を唱えたに違いない。

エルンスト・ロイヒリンは 1577 年にリュウベックで、ペストに関する「簡単な注意」を書いた。彼はペストを告げる徴候として多様な四足動物の死を挙げる。そこから立ち上る臭気がペストの原因とされる。しかしロイヒリンによると、全ての動物が均等にペストに襲われるわけではない。「家畜の牛や豚、羊やヤギ、しかし馬もそれほど簡単にペストに襲われるわけではない。犬はもっとそうだ。それどころか犬はペストを追い払うと言われる、皇帝マクシミリアン一世の侍医も書いているように。…。ひとりの医師がいた。彼は町のすべての犬を殺害し、それが完全に腐り、空気が悪臭や腐敗で満たされるまで、通りや小道にしばらくそれを放置すべきだと勧告した。それがなされ、都市はペストから解放された。」³⁰ しかし注意すべきは、ロイヒリン自身はこの意見に慎重な態度を崩さないことである。彼は情報の元として皇帝マクシミリアン一世の侍医に言及するが、その真偽を確かめることはできなかった。したがってこのアイデアが誰から出たものか、またその張本人が民間医療の伝統からこのアイデアを得たのか、それとも古代の医術の大家から得たのかはわからない。ペスト対話の無名氏は作中で市民に、それが古代の名医ガレノスから出たものだと言わせた。しかしこれについても確認が取れていない。いずれにしても

16 世紀の医師たちの間に、ペスト毒がペスト毒によって追い払われるというアイデアが広まっていたことは、彼らがこの療法の有効性を認めたかどうかは別として、間違いなさそうである。

ブレーメンの侍医ヨーハン・エーヴィッヒ（1525-1588）は、『ペスト条例：有益で必要な注意』を執筆した³¹。彼は格言を使って問題になっている医学の説を紹介する。「毒が毒を追い払う、釘が釘をそうするように。このような時期にペストの空気を香りのよいもので変えたり、浄化したりしようとはせず、悪臭を放つもので満たし、燻蒸しようとする民族もある。」³² 彼はモスクワの人たちがそれで成功したと言う。しかしそれは極端な例外状況から起きた。「われわれは毒を弱めるために、ペストの時期に死んだ犬を通りにまくモスクワの人たちの習慣に動かされるべきではない。それはけだものも同然で、もしかするとそこでしか通用しないからだ。」³³ エーヴィッヒは奇怪な治療法を興味津々で報告するが、この治療法に決して期待しているわけではない。

毒の利用という問題については、訳出したペスト対話のやり取りも示唆に富む。わたしはこの文書は地域性、内容からルター派の医師によって書かれたと推測するのだが、対話中で著者の意見を代弁する市民は、毒の投与に対して前向きな姿勢を示す。しかし認めているのは、ペストの毒を患者の腫瘍に塗ることによって毒素を体内から吸引する方法だけである。彼はそれを「磁力の理論」とも呼んでいる。この磁力の理論は毒の使用の一変種とみることができる。しかしペスト対話の著者は、それ以外のペスト毒の使用については態度を明らかにしていない。むしろ死んだ動物を通りにまく方法には断固反対する。ルター派医師のペスト文書においてもペスト毒を使う可能性が真剣に議論された。しかし彼らはその実用に対してはつねに慎重な態度を崩さなかった。

カトリックの医師ヒポリトゥス・グアリノニウスにとっても、ペストがペスト毒によって防げるかどうか、それによって治せるかどうかが問題であった。彼は信仰と敬虔にかけてそれを峻拒する³⁴。ペスト毒の使用に断固反対する姿勢は、カトリックの医師に共通する態度であった。将来の予防接種を想起させる毒を使った治療に対する考え方に、三つの宗派の違いが現れた。予防接種といえば天然痘に対する種痘が思い出されるが、ペストも天然痘も、伝染性の病気として、近世には似たようなものと意識されていた。17 世紀にはまだ、予防接種の可能性は天然痘ばかりでなくペストに対しても追究されていた節がある。しかしやがてペストに対する予防接種の可能性は放棄される。ペストの毒性ははるかに強く、致死率も高いのは誰の目にも明らかであった。ペストにも予防接種をという期待の余韻はその後も残り続けるが、遅くとも 18 世紀にはペストに対する予防接種の可能性は断念され、それは事実上天然痘だけに絞られる。種痘に対する三つの宗派の医師の異

なる反応に、毒を使った治療に対する態度の影響が垣間見える。

エドワード・ジェンナー (1749 - 1823) が 1798 年に牛痘接種の発見を公刊する前に、種痘の成功例がいくつもあったことはよく知られている。面白いことにそれらはカルヴァン派の世界から伝えられている。例えばニューイングランドの改革派の牧師コットン・マッター (1663 - 1728) は、新世界ばかりか旧世界でもその名を知られた。彼が疫病流行時に、天然痘に対する予防接種を支持し、外科医ツァプディール・ポイルストーンに要請し、種痘の初期の成功例を物させたからだ³⁵。『ビブリオテーク・ブリタニック』誌に掲載された、牛痘の原因と影響に関するジェンナーの調査に最初に注目したのは、スコットランドのエディンバラ大学で学んだジュネーヴ出身の医師たちであった。これらの開業医が大陸部で牛痘接種の普及に尽力した。カルヴァン派のふたつの牙城ジュネーヴとスコットランドが、牛痘接種の普及に最大の功績を果たしたのは偶然であるまい³⁶。また、ペスト毒の利用に最も前向きであったカルヴァン派の医師が、種痘の歩みに偉大な足跡を残したのも、決して偶然ではあるまい。

ルター派が盛んな地域エアフルトの詩人にして医師、文献学者でもあるダニエル・ヴィルヘルム・トゥリラー (1695 - 1782) は、彼の 1766 年の『試される種痘：医療道徳の詩』で、原則として種痘に賛同した³⁷。しかし種痘の濫用には警戒する。そして医師が種痘に対して慎重な態度をとることを要請する。「なぜペストを人に注入しないのか。人がペストに感染しないように。だから注入者は、早まって神と自然を制御しようとしていないか、よく考えてみるべきだ。」³⁸ 彼はまた別の箇所では種痘によって予期せず天然痘を広めてしまうことを警戒する。そのさいペストについても発言した。「天然痘はやがて手の施しようのないペストになる。」³⁹ 彼はイメージのなかで天然痘からペストを連想したが、予防接種の効果の点では両者を峻別した。「賢い人ならペストに対する処置としてペストを使ったりしない。しかし天然痘を投与させる人はそれをやる。彼は実際快復のための処置として毒を使う。」⁴⁰ 彼の本当の狙いは、接種者に種痘の効果を過信しないよう警告し、種痘技術改良のための不断の努力を怠らないよう訴えることであった。ここで彼の興味深い論点をいくつか紹介したい。それは医療倫理や「インフォームド・コンセント」の初期の例を示すかもしれない。「なぜならあなたが百人の病人を危険から救うとしても、たったひとりでも死ぬものがあれば、そのたったひとりのために良心が痛むからだ。数々の成功例は、失敗例がたとえひとつしかなくてもそれを相殺しない。」⁴¹ 百の成功例もたったひとつの失敗を正当化しない。彼はまたそれを別の方法で解説する。「動機は非の打ち所がない。それでもまだ最後に言われる。しかし動機によって結果が正当化されるわけではない。非の打ち所のない動機には、非の打ち所のない手段を選ばなければならない。」⁴² 接

種者はこどもに種痘を受けさせるよう彼らの両親を説得するとき、危険について説明するのを避けてはならない。医師が説明責任を果たさなければ、被験者の心労が重くなり、ひいてはそれが失敗を招きかねない。それが種痘に対する不安につながる。トゥリラーはこの悪循環を断つことを目指す。

フランスの歴史家イヴ・マリ・ベルセは、牛痘接種の普及に関する研究において、カトリック諸国では接種に対する強烈な抵抗があったことを指摘する⁴³。カトリックの医師たちは18世紀に、種痘に対して同じような抵抗を示したようだ。トゥリラーは前述の詩で伝える、「フランスでは高等法院も種痘を遠ざけ、自由に認めようとはしなかった、天然痘が空気を汚染しないように。」⁴⁴ 1722年のイングランド人メイトランドの観察もそれを補う⁴⁵。「わたしはフランス人とイタリア人がこれを始めなかったのを、それからブルボン家が種痘を受けていないのを、種痘に反対する有力な論拠とみなすことはできない。」⁴⁶ 当時の著述家は、異口同音にカトリック諸国の種痘に対する抵抗を伝えている。

カルヴァン派の医師は、ペスト治療へのペスト毒の利用という未知の医療の開拓に積極的に乗り出した。それは多少暴走気味に感じられることもあった。一方ルター派の医師は、毒の利用という未知の医療の可能性を否定はしないが、実施には慎重な姿勢を崩さなかった。カトリックの医師は毒の利用そのものを阻止しようとした。ペスト治療や種痘以外の分野でも、先進医療に対するこのような宗派間の違いが見られるのかどうかはわからない⁴⁷。しかしこれらの三類型は、宗派や宗教の枠にとらわれず、われわれの近代医療に対する態度にも見出すことができるだろう。

註

- 1 近世の製本業者に関するはじめての本格的な研究として、ウーテ・マリア・エツォルトのブラウンシュヴァイク侯国の製本業者に関する研究が有益である。Etzold, Ute Maria, *Die Buchbinder und ihr Handwerk. Im Herzogtum Braunschweig von den Gildegründungen unter Herzog August bis zum Ersten Weltkrieg 1651 bis 1914*, Braunschweig 2007.
- 2 例えば、Kestner, Christian Wilhelm, *Medicinisches Gelehrten=Lexicon. Darinnen Die Leben der berühmtesten Aerzte, samt deren wichtigsten Schriften, sonderbaresten Entdeckungen und merkwürdigsten Streitigkeiten*, Jena 1740.
- 3 ペスト病院については、Ulbricht, Otto, *Pestospitäler in deutschsprachigen Gebieten in der Frühen Neuzeit. Gründung, Wirkung und Wahrnehmung*, in: Ders. (Hg.), *Die leidige Seuche. Pest-Fälle in der Frühen Neuzeit*, Köln 2004, S. 96-132.

- 4 フラカストーロの著作については、以下の独語訳を参照した。Fracastoro, Hieronymus, *Drei Bücher von den Kontagien, den kontagiösen Krankheiten und deren Behandlung* [1546], übers. und eingel. von Fossel, Victor, Leipzig 1910. なおフラカストーロの功績については、梶田昭『医学の歴史』講談社学術文庫、2003年、156頁以下。
- 5 Porzelt, Carolin, *Die Pest in Nürnberg, Leben und Herrschen in Pestzeiten (1562-1713)*, St. Ottilien 2000, S. 31.
- 6 Crafftheim, Johannes Crato von, *Ordnung der Praeservation: Wie man sich zur zeit der Infection verwaren, Auch bericht, wie die rechte Pestilentia erkandt, und curirt werden soll: Mit einer lere, von dem vorsorg der Geschwieren*, Breslau 1553, S. B j, D iij, E ij u. G j.
- 7 Crafftheim, *ebenda*, S. B j, C j, C iij, H ij u. J j.
- 8 „Das reuchern bey den Reichen ist am besten mit meinem Rauchpulffer/ sonderlich wenn mans mit Rosen vnd Caneel Wasser auffseud. Bey den armen mit Wachholder beer oder holtz/ Eichen blettern/ vnd wermuth/ auch Essig auff einen heissen Stein gossen“, in: Horst, Jakob, *Rath in pestilentz zeiten/ Wie man die verhüten/ vnd in nothfall curiren sol/ zu nothurfft aller bussfertigen Christen*, Heinrichstadt 1597, S. B j.
- 9 Reuchlin, Ernst, *Zwo Hausstaffeln vnd vnderricht vor die Reichen vnnd Armen/ zur Sommer vnd Winter zeit/ wider die fürsterbende/ schreckliche vnd wegkfressende pestilentz/ die nicht allein (wie der Königliche prophet/ Psal: 91. saget) im finstern schleichet/ sondern auch im Mittag/ als ein wütender Mörder eilends vnzeliche Menschen tödtet*, Lübeck 1577.
- 10 „... sollen sich die Reichen vornemlichen befeissen/ das sie inn solcher Seuche leichtdauliche Speise geniessen/ Nemlich Rindfleischsuppen von jungen Rindern/ .../ Also auch Kalbfleisch/ jung Rindfleisch/ Der gemeine Man vnnd die Armen/ die gedachte Speise nicht wol haben können/ vnnd bey ihrem Schweinen Fleisch (das doch sehr schedlich) bleiben müssen/ wenn sie dasselbige kochen/ sollen sie es mit essig ein wenig sauer machen. Aber da sie es sonsten Rohe vnnd die Schincken essen/ sollen sie ein wenig Knobeloch oder Rübretlich darzu essen.“, in: Reuchlin, *ebenda*, S. E iij - F j.
- 11 Reuchlin, *ebenda*, M iijj.
- 12 パレの著作については、以下の独語訳を参照した。Pareus, Ambrosius, *Von der Pestilentz vnd Pestilentzischen Fiebern* [1568], in: Ders., *Wund-Artzney spiegel. Sampt angehengter Lehr von allerhand gifften, von der Pest, deren Praeservation ...*, übers. von Uffenbach, Petrus, Franckfurt am Main 1635, S. 693-738. 人間概念については、例えば、S. 693, 706, 708 u. 718.

- 13 パレの生涯については、梶田『前掲書』、165頁以下。
- 14 以下の英訳を参照した。Sydenham, Thomas, *De peste sive febre pestilentiali (Of plague or the pestilential fever)*, in: *Methodus curandi febres, propriis observationibus superstructure: the Latin text of the 1666 and 1668*, with Engl. transl. from Latham, Robert Gordon (1848); introd., notes and index by Meynell, Geoffrey Guy, Folkestone 1987, pp. 166-217. 引用は、例えば、pp. 172-175. なお、シデナムの生涯については、梶田『前掲書』、192頁以下。
- 15 Guarionius, Hippolytus, *Pestilentz Guardien/ Für allerley Stands Personen, mit Säuberung der inficierten Häuser, Beth- Leingewandt, Kleider, etc. durch 3 sonders außerlesneste Pest Waffen, darunter der wahre philosophische Stein*, Ingolstadt 1612, S. 135/ H iij ff. この文書の存在を教えてくれたのは、ヘルツォーク・アウグスト図書館のゲスト Dr. Peg Katritzky である。彼女の助言に感謝したい。なお、グアリノニウスについては、Amann, Klaus (Hg.), *Hippolytus Guarionius: Akten des 5. Symposiums der Sterzinger Osterspiele (5.-7. 4. 2004): "Die Greuel der Verwüstung menschlichen Geschlechts"; zur 350. Wiederkehr des Todesjahres von Hippolytus Guarionius (1571-1654)*, Innsbruck 2008.
- 16 Fettich, Theobaldum, *Ordnung vnd Regiment/ wie man sich vor der scharpffen vnd giftigen Kranckheit der Pestilentz bewahren soll: Auch wie denen/ so darmit begriffen/ zuhelffen sey. Sambt den natürlichen vrsachen des Englischen Schwaiß*, München 1585, S. B j-Biiij.
- 17 ヨーハン・ハインリヒ・フライタークの経歴については、*Kaestner, a. a. O.*, S. 316.
- 18 Freitag, Johann Heinrich, *Summarischer/ doch gründlicher Vnterricht/ vnd rahtsames Bedencken/ wie man sich vor denen jetziger zeit Jahrs gemeinlich grasirenden Contagios-Kranckheiten/ namentlichen vor der Pest/ Pestilentzialischen/ malignirenden/ hitzigen Hungarischen Fleckfiebern/ auch Pocken vnd Ruhren/ theils praeserviren, vnd im Nohtfall ohn zuthun der Medicorum durch Göttlich verleihen selbst curiren könne vnd möge*, Halberstadt 1636, S. B v - B vj.
- 19 Freitag, *ebenda.*, S. D ij und D iij.
- 20 Freitag, *ebenda.*, S. L vij.
- 21 Freitag, *ebenda.*, S. L ij.
- 22 Hirsch, A., Art. Freitag, Johann, in: *ADB 7*, 1877 (ND, Berlin 1968), S. 351.
- 23 キルヒャーのペスト文書は、*Athanasius Kircheri E Soc. Iesv Scrutinium Physico-Medicvm Contagiosae Luis, quae Pestis dicitur: Ovo Origo, causae, signa, prognostica Pestis, ... vñ cum appropriates remediorum Antidotis nouâ doctrinâ in lucem eruuntur. Ad Alexandrvm VII.*

- Pont. Opt. Max.*, Romae 1658. また、フラカストーロとキルヒャーの関係については、Strasser, Gerhard F., *Ansteckungstheorien der Pest in der Frühen Neuzeit am Beispiel von Girolamo Fracastoro und Athanasius Kircher*, in: Feuerstein-Herz, Petra, *Gotts verhengnis und seine straffe - zur Geschichte der Seuchen in der Frühen Neuzeit*, Wiesbaden 2005, S. 69-76.
- 24 プロニスワフ・ゲレメク 著 (早坂真理訳) 『憐れみと縛り首 ヨーロッパ史のなかの貧民』 平凡社、1993 年。
- 25 宗派化論に関する研究動向については、とくに以下の文献の研究史の紹介を参照した。踊共二『改宗と亡命の社会史 近世スイスにおける国家・共同体・個人』創文社、2003 年。
- 26 Pareus, *a. a. O.*, S. 699.
- 27 Pareus, *ebenda*, S. 699.
- 28 „Es tragen etliche auch zu abtreiben des gifts auff der blossen brust in einem rotten Zindel/ Arsenicum, Mercurium sublimatum, vnd andere giff. Denn sie sagen/ dass das giff mit giff/ gleich als böses mit bösem vertrieben wird. Welchen leuten ich warlich nicht beyfal geben kan.“, in: Bockelius, Johannes, *Pestordnung/ in der Stadt Hamburg*, Hamburg 1597, S. 40/ L iij.
- 29 „So geben auch etliche für/ man soll die lufft mit bösem stinckenden geruch enderen/ vnd dadurch das giff vertreiben. Wie etliche meinen/ dass man soll Hunde/ Katzen/ vnd andere Thiere tödten/ vnd dieselbe auff den gassen/ dass die daselbst faulen/ ligen lassen/ durch denselben stinckenden geruch solle die Pestilenzische lufft verendert/ vnd das giff also vertrieben werden. Solchs ist aber wieder aller gelarten meinung/ die da wollen/ dass die lufft soll sauber/ rein/ vnd so viel müglich/ von allen dempffen trucken gehalten werden.“, in: Bockelius, *ebenda*, S. 40/ L iij.
- 30 Reuchlin, *a. a. O.*, S. B j - B ij.
- 31 Ewich, Johann, *Pestilenzordnung: Nützlicher vnd notwendiger vnterricht/ .../ in Deutsch gebracht/ Durch Justum Mollerum*, 1584.
- 32 „Es möchte mir aber allhie vielleicht einer fürwerffen das gemeine Sprichwort/ Eine Giff vertreibt die andere/ wie ein Nagel den andern. Item/ den Gebrauch etlicher Völcker/ welche zu solchen zeiten den pestilenzischen Lufft pflegen nit mit wolriechenden dingen endern vnd reinigen/ sondern mit stinckenden dingen erfüllen vnd reuchern.“, in: Ewich, *ebenda.*, S. G iij - G v.

- 33 „Vnd sol vns allhie nicht bewegen die gewonheit der Muscouiter/ welche zur zeit der Pestilentz pflegen todte Hunde in die Stedte hin vnd wider werffen/ die Gifft zu dempffen/ denn solches ist gar Viehisch/ vnd vielleicht demselben Orte allein dienstlich.“, in: Ewich, *ebenda.*, S. S. j.
- 34 Guarinonius, *a. a. O.*, S. 127/ H viijff.
- 35 Smylie, James H., The Reformed Tradition, in: Numbers, Ronald L. and Amundsen, Darrel W. (ed.), *Caring and curing: health and medicine in the Western religious traditions*, New York 1986, p. 212-213.
- 36 イヴ・マリ・ベルセ著 (松平誠・小井高志監訳) 『鍋とランセット 民間信仰と予防医学』新評論、1988年、18頁以下。
- 37 Triller, Daniel Wilhelm, *Geprieffte Pockeninoculation: ein Physicalisch-Moralisch Gedicht, mit nöthigen Anmerkungen und Zusätzen erläutert*, Frankfurt und Leipzig 1766. トウリラーの経歴については、Pagel, Art. Triller: Daniel Wilhelm, *ADB*, Bd. 33, 1894 (ND, Berlin 1971), S. 608-615.
- 38 „Warum pfpofft man nicht auch die Pest den Menschen ein. Damit sie von der Pest nicht angestecket seyn? Daher die Pfpofer nun bey sich bedencken sollen, Daß sie GOtt und Natur aus Vorwiz, meistern wollen“, in: Triller, *ebenda*, S. 26f.
- 39 „Die Pocken=Kranckheit wird alsdann, zu einer Pest, Die sich durch keine Kunst hernach vertreiben last“, in: Triller, *ebenda*, S. 63.
- 40 „Kein Kluger braucht die Pest zum Mittel vor die Pest; Und dennoch, thut es der, der Pocken pfpofen last; Der brauchet wircklich Gift, als Mittel zum Genesen“, in: Triller, *ebenda*, S. 113.
- 41 „Denn, auch gesetzt, daß es bißweilen, euch gelingt, Daß ihr aus der Gefahr auch hundert Krancke bringt; Wenn nur ein einziger von ihnen, sterben müssen; Bleibt dieser einzige doch euch auf dem Gewissen. Sprech nicht: die grose Zahl, die unsre Kunst erhält, Bringt reichlich wieder ein, wenn einer auch verfällt:“in: Triller, *ebenda*, S. 163.
- 42 „Die Absicht war doch gut; so sprecht ihr noch zuletzt; Doch, nach der Absicht wird der Ausgang nicht geschätzt, Zur guten Absicht muß man gute Mittel wählen,“, in: Triller, *ebenda*, S. 173.
- 43 ベルセ 『前掲訳』、128頁。
- 44 „Drum hat in Franckreich auch, das hohe Parlament Die Pfpofung fernerweit, nicht frey verstaten wollen, Damit die Pocken nicht die Luft vergiften sollen“, in: Triller, *ebenda.*, S.

63.

- 45 *Mr. Maitland's Account of inoculating the small Pox vindicated, Fron Dr. Wagstaffe's Misrepresentations that practice, with some Remarks on Mr. Massey's Sermon*, London 1722.
- 46 „I cannot allow it as a solid Argument against Inoculation, that the French and Italiens have not begun it; no more, than the House of Bourbon has never been Inoculated“, in: Maitland, *ibid.*, p. 14.
- 47 西欧の諸宗派と医療の伝統の関係については、Numbers, Ronald L. and Amundsen, Darrel W. (ed.), *Caring and curing: health and medicine in the Western religious traditions*, New York 1986.

【追記】本稿は、平成 19～21 年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、課題番号 195206415001、研究課題名「近世ヨーロッパの神学的ペスト文書—世界の脱魔術化に関する学際的研究」による研究成果の一部である。この間、ヘルツォーク・アウグスト図書館 Herzog August Bibliothek の研究助成 Stipendium を受けることもできた。